

「男、突っ走る！」

第83回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也	野倉 浩太	富永 茜	佐藤 美	大坂 美	長野 優美
(23)	(21)	(22)	(21)	(16)	(17)

『オフィスツリーイン』代表	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー
---------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

1 木内家・雅也の部屋

雅也が印刷機の前に立っている――書類が印刷され、それを手にすると、深呼吸をして出ていく。

2 喫茶店

雅也と麻美が話している。

雅也「ごめんね。呼び出しちゃって」

麻美「ううん。今日は、メンバーだけの打ち上げもあつたから、どっちにせよ出かける予定だったし」

雅也「実はね、お盆明けに、『スリジェネ』の運営会議をやったんだけど、ハルさんと田所さんが運営を下りることになってね」

麻美「どうして？」

雅也「ハルさんも田所さんも、あくまで『七夕物語』を手伝うために運営に入った人なの。まあハルさんは、せっかく作った歌を、あの一回のミュージカルだけで終わらせるのは惜しいからって、来月末にライブハウ

スで、ハルさんと選抜メンバーのデュエツ
トライブをすることになったわけだけど」

麻美「ああ。この間、LINEに案内来てた
ね」

雅也「それにね、国枝さんが総合プロデュー
サーとしての仕事に専念することになって、
その代わりに『スリジエネ』の代表を俺が
やることになったの。でも、現在でも運営
とメンバーの橋渡しになってるのに、代表
をしながらその役を兼任するのは難しいか
ら、この際メンバーの何人かを運営チーム
に入れないかなと思って。それで、メン
バーの副リーダーだったアサミンに、お願
いできないかと思って。(と書類を見せて)
これが、主な運営でやる業務内容なんだけ
ど」

麻美「うちーが代表になるってことは、リ
ーダーはどうなるの？」

雅也「それも話に出てね。俺はメンバーでは
なく、あくまで運営代表ってポジションに

なるわけ」

麻美「じゃあ、メンバーリーダーはどうするの？」

雅也「そこもまた考えなきゃいけない。もし、アサミンがそのまま副リーダーとして運営も手伝ってくれるんだったら、アサミンとやりやすい人をお願いしても良いかなとは思ってるんだけど」

麻美「メンバーを運営に入れる話、他に誰かに打診してる？」

雅也「コウタととみーには、話してる。今日は、とみー久しぶりにライブやるって名古屋に行ってるでしょ。打ち上げの前に、とみーとコウタと会って、運営のこと相談することになってるの」

麻美「そっか」

雅也「アサミンは、どう思う？」

麻美「それなんだけどね……私も、九月のハルさんのライブが終わったら、『スリジェネ』辞めようと思ってるの」

雅也「え……」

麻美「私も、あくまで『七夕物語』に出演するだけのつもりだったから、まさかそのまま継続的に活動するとは思ってなかったの。けど、あの一回だけで去るのも心苦しいと思っただから、九月末を区切りにしようかと思っただけ」

雅也「そうだったんだ……」

麻美「ごめんね。もっと早くに相談すれば良かったね」

雅也「国枝さんには、このこと……」

麻美「まだ話してない。でも近いうちには話す予定。二期生メンバー募集のこととか、いろいろ国枝さんも忙しいから、タイムイングを見て言おうと思う」

雅也「……」

麻美「私は『スリジェネ』を辞めるけど、うちーは頑張ってるね。今回のミュージカルで、一番著しく成長したのは、うちーだ。代表になったのはびつ

くりしたけど、演出も担当すれば、うち
ーの実力にもなると思うしね」

雅也「……」

麻美「みんなにも、まだ黙っててね。国枝さ
んと相談したうえで、公の発表するから。

あ、コウタととみーには言っても大丈夫だ
よ」

難しい顔の雅也。

3 ライブハウス・表

浩太、美央、優美がやってくる。

美央「あ、ここじゃない？」

優美「あった、ここだここだ」

浩太「良かった、間に合った」

と、中へ入っていく。

4 同・店内

ステージで、ギター弾き語りライブを
している茜——その様子を見ている浩
太、美央、優美。

5 喫茶店

雅也と麻美が話している。

雅也「『スリジェネ』辞めた後、どうするの？」

麻美「大学生活も、あと一年半残ってるしね。これから就活も始まるし、私は、私のタイミングでいろいろ決めていきたいって思ってる」

雅也「そっか……」

麻美「辞めても、みんなとの縁が切れるわけじゃないし」

雅也「でも惜しいな。アサミンは、演技も歌も上手いのに」

麻美「（苦笑して）そんなことないよ」

雅也「『七夕物語』の最初の読み合わせの時から、すごいなって思ってたもん。それに、元々アサミンもコウタも、国枝さんがプロデューサーをした市民映画に出演してたってことは事前に聞いてたから、経験者であ

ることは間違いないって思ってたからね。

案の定、演技が自然というか、ちゃんと役になりきってるというか、こういう上手い人が『スリジェネ』を引っ張っていくものだって思ってたのに。俺みたいに、経験値もなくて、ただ運営とのパイプ役だからリーダーにのし上げられた者とは実力が違うんだもん」

麻美「演技力とか歌唱力とか、そういう実力よりも、メンバーを束ねる力があるかどうかだと思おうよ」

雅也「……」

麻美「十三人も個性的なメンバーがいて、その中でも私は、うちーだからこそリーダーが務まったんじゃないかって思ってるよ。多分、他の人がリーダーやってたら、まとまるものもまとまらなかった気がする。うちーの人柄で持つてるようなもんだよ。実力なんて二の次」

雅也「そう言ってもらえると、ちよつとホッ

とするけどね」

麻美「演技が上手くても、人望がなかったら誰もついてこないでしょ。でもうちーが、運営とのパイプ役というミッションをちゃんとやってることは、メンバーのみんなが知ってる。だから、ちょっと演技や歌が上手くなくても、応援しようって気になれるんだよ。それに、うちーが頑張ってる努力してるから、自分も頑張ろうって、他のメンバーが思うようになってくれれば、それが理想的でしょ。うちーは、もう既にそういう姿を見せてるんじゃないかな」

雅也「俺が代表になるって知ったら、みんなどう思うかね」

麻美「それこそ、うちーを支えてあげようって思うんじゃないかな。演劇祭のほうだつて、初めての演出でしょ。だから、みんなで頑張ろうっていう空気になると思うけど」

雅也「……」

麻美「演劇祭のほうは、準備進んでるの？」

雅也「一応、初稿は書き終えた。次の稽古で、一回読み合わせをしようかなと思ってる。

本番までのスケジュールとか、そういうことも演出がやらなきゃいけないでしょ。分からないことが多いし、初めてだから、そもそも何をどうして良いのか、何が分からないのが分からない状態だからね。ヤマさんとか、経験者の方にいろいろ教えていただきながら、稽古を進めていこうと思ってる」

麻美「もう書き終えたんだ」

雅也「そりゃ、基礎練習ばかりってわけにはいかないでしょ。早い方が良いと思って、それに今回は、ミュージカルじゃなくて、ほぼ一時間演劇一本でしょ。早いうちに準備しとかないと、いろいろ不安でね」

麻美「本番は見に行くわ。みんなの晴れ舞台だし、うちーの初演出作品なんでもんね」
雅也「ありがとう」

麻美「あ、私買い物してから、直接打ち上げ合流するわ。(と財布から五百円を出して)じゃあ、また後ほど」

雅也「うん」

出ていく麻美を、不安そうな顔で見送る雅也――鞆からノートパソコンを取り出すと、仕事を始める。

6 ライブハウス・廊下

浩太、美央、優美が待っている――ギターケースを背負った茜が出てくる。

茜「今日はありがとう。わざわざ来てくれて」

美央「せっかくのとみーのステージだもん。

どうしても見に来たくて」

優美「私も、とみーがどんな風に歌うのを見てみたかったし」

茜「やめてよ、恥ずかしい」

浩太「俺は、今日引率みたいな感じで来た」

茜「コウタもありがとう」

美央「今日、打ち上げみんな来るよね？」

茜「うん。ただね、私とコウタは、その前に
うちーと会わなきゃいけないくて」

優美「うちーと？」

浩太「そうなんだよ。何でも、今後の『スリ
ジェネ』のことで相談したいことがあるか
ら時間取ってくれないかって言われて。そ
れなら、打ち上げの前だったら良いんじゃない
かって」

美央「そうなんだ」

茜「もう行こうか。今から電車乗れば、ちょ
うど良い時間帯になるでしょ」

浩太「オッケー」

7 喫茶店

雅也がパソコンで仕事をしている――
ドアが開き、茜、浩太、美央、優美が
入ってくる。

雅也「（気づいて）あれ、美央と優美も一緒
だったの？」

浩太「今日、とみーのライブ行ってたんだよ」

雅也「あ、ごめん。いけなくて」

茜「大丈夫」

美央「コウタととみーに話があるんなら、私
たち違う席のほうが良い？」

茜「そうだね。ミオとユミには悪いけど、違
う席で」

優美「オッケー」

美央「はい」

と、少し離れた席に座る美央と優美。

雅也「俺たちが話してる間、好きなもの注文
して良いよ」

美央・優美「はい」

雅也「（茜と浩太に）ごめん呼び出して、ま
あ座って」

雅也と対面するように座る茜と浩太。

雅也「実はね、二人に相談があったのは……」

浩太「運営のことだろ？」

雅也「どうして……」

茜「多分、そんなことじゃないだろうかって、
こっち向かう電車の中で、コウタと話して

たの」

雅也「まさしく……その運営のことなの……」

× × ×

離れた席でケーキを食べている美央と

優美。

美央「（雅也たちの席を見ながら）ねえ、三

人とも何話してんだろう」

優美「さあ？」

× × ×

コーヒー片手に、書類を見ながら話し

ている雅也、茜、浩太。

茜「そんなことになってたんだ……」

雅也「うん……」

浩太「けど、これからうちーは、代表やり

ながら、市民演劇祭の脚本と演出もやるん

だろ。それに、メンバーじゃなくて代表専

任になるんなら、前みたいにリーダート副

リーダーが必要だろ」

雅也「そうなの。だから、何とかそのポジシ

ョンを、コウタととみーにお願いできない

かと思つて。二人に負担をかけさせることは分かつてる。でも……お願いします（と頭を下げる）」

茜「そんな硬くならないでよ」

雅也「とみー……」

茜「私たち、『七夕物語』の時、うちーに頼りすぎてた部分があつたと思うの。運営と兼任してるうちーがいれば何とかなるだろうって。でも、それじゃ私たちダメだと思ふの。主体的ってわけじゃないけど、私たちだつて自分の行動に責任もつて、ちやんとやらなきやと思つてる」

浩太「そうだよな……。何より、俺はうちーが心配だよ」

雅也「え？」

浩太「ヤマさんと国枝さんの間に挟まってみろ。お互い、画が強いのに、このままだとうちーは名前だけの代表になっちゃうぞ」

茜「ああ、その可能性あるね」

浩太「俺たちが運営に入つて、少しでも『ス

リジェネ』全体が良くなるんなら、俺は運営に入る」

雅也「コウタ……」

茜「私も。何だったら、私がリーダーやる。

それで、コウタが副リーダー。これでど

う？」

浩太「俺はそれで良い」

雅也「二人とも……ありがとう」

茜「これ以上、うちのーの負担を増やすわけ

にはいかないでしょ。前みたいに倒れられ

たら困るし」

雅也「あの時は、本当にすいませんでした」

茜「またあんなふうにならないように、これ

からは私とコウタが、運営に入ってうちの

ーを支える。お互い、頑張ろう」

雅也「運営に巻き込むようなことになってし

まったことは申し訳ないと思ってるけど……

……本当にありがとう」

浩太「それにさ、俺たちはあくまで、メンバ

ーとしてステージに立つんだろ。そのため

だったら、時には厳しいことだって言わなきゃいけないこともある。恋愛関係になんて、まず発展しないよ。そんなことしたら、お互い稽古やりづらくなるし」

雅也「そうだね。周りにも影響出ちゃうもんね」

茜「これで、何とかうちーの悩みは解決した感じかな？」

雅也「うん……。メンバーを説得して、運営に入れることが、今日のミッションだったから」

浩太「ミッション？」

雅也「国枝さんとヤマさんに、メンバーを説得するようにって言われて」

茜「それって、普通国枝さんがやることなんじゃないの？」

雅也「でも、代表は俺になるわけだし」

茜「まだ公になってわけじゃないんなら、国枝さんが私たちに頼むのが普通なんじゃないの？ 総合プロデューサーって、具体的

に何やるの？」

雅也「だから、外部との打ち合わせとか、企画を考えたり、どこかの出演依頼とかがあったらその窓口をやったり」

浩太「それってさ、運営内で何かあった場合の責任は、うちーが取るってことになるよね」

雅也「代表ってのは、そういうことでしょ」
浩太「企画を考えたり、依頼の話は持つてくるけど、国枝さんは責任を持たないってこと？」

茜「え、そういうこと？」

× × ×
ケーキを食べながら談笑している美央と優美。

美央「ねえ、何だか深刻そうな話してない？」
優美「『スリジェネ』で、何をそんなに難しい話するところがあるんだろ」

美央「さあ」

× × ×

雅也「……」

茜「総合プロデューサーと代表の違いが、私にはよく分からない。次の運営会議から、私たちも参加するから、その時に国枝さんに確認してみよう」

浩太「そうだな」

雅也「ありがとう。俺、そこまで頭回ってなかったわ」

茜「市民演劇祭の準備してるんだもん、しようがないよ」

浩太「脚本はもう書いた？」

雅也「うん、初稿だけだね」

浩太「うちーには、脚本と演出に専念したほうが良いかもな。普段の仕事だってあるし、それで運営のことまで考えてたら、いくつ体があっても足りないだろ」

雅也「……」

茜「これ以上、うちーに負担はかけさせられない。そのために、私たちがいるんだから」

雅也「ありがとう。頼りにしてます」

茜「そろそろ行こうか」

浩太「そうだな」

雅也「ごめんね、打ち上げ前にこんな重たい話しちゃって」

浩太「気にするなって、うちー。これから
は、俺もとみーも運営に入るんだ。一人で
悩むのは、作品の演出だけにしとけよ」

雅也「うん……」

浩太、レシートを持つと、美央と優美
の席へ行く。

浩太「お待たせ。打ち上げ行くか」

美央「行こう」

優美「今日は、それが楽しみだったんだから」

茜「（雅也に）私と浩太が、上手く調整する
から。うちーは、立場上あまり言えない
こともあるけど、私たちはメンバーとして
おかしいと思ったことがあったら、すぐに
言うから」

雅也「何から何まで、ありがとう」

茜「（微笑んで）さ、打ち上げ打ち上げ」

雅也「そうだね」

レジで会計をしようとしている浩太―

―慌てて雅也と茜がやってきて、

雅也「俺も払うよ」

茜「私だって」

浩太「じゃあ、俺たちの分と、ミオとユミの

分を割り勘な」

茜「オッケー」

雅也「あ、アサミンの分先に預かってるから」

美央・優美「ごちそうさまですッ」

割り勘の数字を確認しながら、会計を

している雅也、茜、浩太。

つづく